

简 讯

☆公开讲座：4月7日1994年度春学期公开讲座开始了。竹田晃主任教授作为第一个击球手出场，他边谦虚地说自己是“抛砖引玉”，边根据“请自隗（怪）始”（注）的故事，作了题为〈中国谈论鬼怪的传统〉的讲演。全场满员，讲座大受好评。自先行者打出了最初的漂亮安全打后，每周四的下午“连打”顺利地继续进行着。4月14日：王家骅，4月21日：大矢根淳，4月28日：武安隆，5月5日：玉井敬之，5月12日：张志。（竹田先生以前是棒球少年，昭和21年作为东京都代表队的二垒手参加全国联赛。努力奋战未能奏效，初战失利之际捧球场之土归，以为纪念，成为“甲子园之土”的创始者。

☆4月22日：为纪念国际交流基金北京事务所开设，“中心”和基金北京事务所共同举办的东京都立中央图书馆馆长加藤周一先生演讲会在二层阶梯教室成功举行了，约有300名师生参加了旁听。演讲题目是〈当前日中文化交流的课题〉，加藤先生回顾了二千多年的日中文化交流，强调了在将来的文化交流中互相学习对方长处和优点的重要性。加藤先生说他在欧美各大学多次举办过类似的演讲会和讲座，但成功地用日语讲还是第一次，可见中方的研究者、教师、学生的日语水平很高。他希望以此为经验，进一步加强日中的文化理解和羁绊。

在讲演之前，加藤先生曾在朝日新闻晚报《夕阳妄语》一栏中（4月19日的〈北京之春〉），介绍了3月26日在中心共同利用室举办的南京艺术学院成公亮教授七玄琴演奏会的情况，给予了极高的赞赏。

☆4月25日～5月1日在上海复旦大学举办的“战后日本社会保障制度”国际研讨会上，“中心”讲师宋金义的论文〈日本农村的社会保障及其对中国的启示〉一文受到中外专家的好评，并获优秀论文奖。

☆4月29日～5月2日：由陈海良副主任带队，“中心”组织了17名专家及其家属去风光明媚的海城—青岛游览观光。大家饱吸着海边的新鲜空气，为崂山的雄壮叹为观止。

☆5月3日～4日：“中心”师生在二十一世纪剧场观看了日本现代舞蹈团“共振”访华巡回演出的首场舞。演出玄妙精彩，令观众大为倾倒。

☆关于第六届学术研讨会：经过最近两次由熊谷先生和陈海良副主任主持的中日方研讨委员会会议，已基本决定了研讨会的具体日程、会场及座长入选等。现在，“中心”的全体教职工正全力进行最后阶段的准备工作。

注：

隗：郭隗，战国时代燕昭王之臣名。他有“请自隗始”一语，意为如欲网罗人材最好从我开始。这里竹田先生的演讲题目是关于“怪”的，“隗”与“怪”的日语发音相同都是カゲ，这里取其双重含义。

湿度、坡和小洋房：青岛的印象

田所宽行

“我闻到海潮的香味了！”这是刚到青岛飞机场时大矢根夫人发出的第一声。

在这以前只在印象中认识到的海城青岛，突然一下子通过嗅觉、触觉等所有的感觉实实在在地包围了我。这就是和“湿度”——北京所欠缺的、我们所饥渴已久的东西的初次相会。在北京时由于皮肤被迫适应无情的干燥，肤感确实磨损了许多，碰到湿度以后感觉一下子恢复了。去饭店途中，我简直是象活过来一般贪婪地品味着吹进车窗的席席晚风。

第二天，从小鱼山的楼上远眺青岛全景，真似透明般地美。和北京的因尘土而黯淡退色的树木不同，这儿的一片片嫩叶都闪着鲜艳的绿色，为德国式的白墙壁、红房顶平添了一分色彩。

据小池先生讲这儿的房屋是由德国人创建的，此后的日本人没能再加工，是很有特色的建筑。首先，屋顶呈两个梯形的重叠状。黑黑的显露在外的梁和柱子似乎要把折线形的窗户围起来。圆圆凸出的阳台上盛开着象是老鹤草的盆景花。这一切的一切都能让你感觉到人间的气息和暖意。我所感受到的也许可以这么说吧。比方说从故宫或胡同窗口浮现出来的人脸，因为是天子、民众之故，只能是没有个性的。而从青岛小洋房窥见的人脸上显然有人的表情。

另外还有一个即坡。如果说北京的威压般的壮是缘于在大平原正中央规划起来的帝王都市之故那么青岛大概就是原来居住在海边的人们自发性地在地地上建造起来的众多房屋的集聚区吧（又据小池说法：欧洲人有“住在海边”的构思，而中国人则没有）。坡上徜徉着喘息着的活生生的人们的悲欢。北京的高高耸立的巨树白杨显然和一个个的斜坡不协调，而稍稍小一点的，即拘谨又富个性的，能和行人对等交谈的法国梧桐及枫树才是最合适的。

崂山的“雄壮”超越了所有旅途中的麻烦，镇服了我们。在小青岛海滩边游玩的乐趣也令人难以忘怀。在工厂喝到的啤酒果然名不虚传。但是，这些全消失后还留在我心目中的青岛的印象，是那刚到街头时“活过来”的感觉。

中文部分的订正及致歉：

1、在前号（35）「新任专家自我介绍」一栏里把小野先生的爱好译成了「打弹子（在家）」，正确的应为「玩个人电脑（网玩型）」特此更正，并致道歉。

2、<慕田峪郊游>一文中把“けつ然人”译成了“大概不然吧”，正确的应为“果然如此”。

センター通信

(第37号)

1994. 5. 16

< ニュース >

◇公開講座：4月7日より、1994年度春学期の公開講座がスタートしました。「抛磚引玉」と謙遜されながら、竹田晃所長が第1番バッターとして登場。「隗(怪?)より始めよ」との故事にしたがって、「中国における怪異を語る伝統」と題する講演をされました。会場は満員となり、大好評を博しました。先頭打者がクリーンヒットで出塁した後、毎週木曜日の午後、順調に連打が続いています。(4月14日：王家驊、4月21日：大矢根淳、4月28日：武安隆、5月5日：玉井敬之、5月12日：張志。なお、竹田先生は、昔、野球少年でした。昭和21年に東京都代表チームの二塁手として全国大会に出場。健闘むなしく初戦敗退の際、グラウンドの土を記念に持ち帰り、「甲子園の土」の創始者となりました。)

◇4月22日：国際交流基金北京事務所の開設を記念して、本センターと基金北京事務所との共催で、東京都立中央図書館長・加藤周一先生の講演会が、センター1階の階段教室で催されました。講演の題目は「当面の日中文化交流の課題」で、二千年を越える日中の文化交流(その大半が日本側の一方的な受容)の歴史を振り返り、あるべき将来の文化交流の理想として、相互に互いの長所や利点を学び合うことの重要性を強調された。会場を埋めた200名を越える出席者に対して、講演は通訳を用いずに日本語で進められた。先生は、こうした類いの講演会や講義を欧米の諸大学で数多く行っているが、日本語だけで行えたのは初めての経験であると述べて、中国側の研究者、教師、学生の日本語能力の高さを称賛された。そして、日本語を解する中国人が増え、中国語を解する日本人が増えることによって、日中の文化的な理解と絆がますます強固になってゆくことを希望された。

講演に先立ち、加藤周一先生は朝日新聞夕刊の「夕陽妄語」(4月19日「北京の春」)のなかで、3月26日にセンター共同利用室で催された南京芸術学院教授・成公亮氏の七弦琴演奏会を紹介し、絶賛されました。

◇4月25日～5月1日：上海復旦大学にて、「戦後日本の社会保障制度」と題するテーマで国際シンポジウムが開催され、本センター講師の宋金文氏が「日本農村の社会保障および中国に与える示唆」と題する報告を行いました。氏の報告は国内外の研究者に好評を博し、優秀論文賞を獲得しました。

◇4月29日～5月2日：陳海良副主任が引率して、17名の専攻およびその家族が風光明媚な海城・青島に旅行しました。皆、海辺の新鮮な空気を満喫し、訪山の壮麗に感動しているといます。

◇5月3日～4日：センターの教師、学生たちは、二十一世紀劇場で催された日本の現代舞踊団「共振」の訪中公演を鑑賞しました。幻想的な舞台劇に多くの観客が魅了されました。

◇第六回シンポジウムにつきましては、熊谷委員長のもと、二回の委員会会議を経て、日程、会場、分科会座長、その他に関する具体的な内容が決定しました。現在は、センターの教職員一同が、全力をあげて最終段階の準備作業を進めています。

湿度と坂と洋館と：青島の印象

田所寛行

「潮の香がしますね!」。青島空港に着いての、大矢根夫人の第一声である。

それまで頭の中の知識でしかなかった海都青島が、いきなり嗅覚、触覚、…あらゆる感覚を動員して私を包み込んだ。「湿度」、北京に欠落し、私たちがそれに飢えていたものとの出会いであった。非情なまでの乾燥にむりやり慣らされ、しかしその分だけ確実にすりへらされてきていた皮膚感覚が一挙によみがえる。ホテルへ急行するバスの窓から入る夜風を、私は文字通り生き返る思いで味わったのである。

翌日、小魚山の楼上から見た青島全市の透き通った美しさ。北京のほこりに白茶けた木々に代わって、ここでは一枚々々鮮烈な緑色に光る若葉たちがドイツ風の白い壁、赤い屋根を彩っている。

小池先生によればドイツ人が創造し、その後の日本人は何物も加え得なかったという特徴的な家々。まずはあの台形を二つに重ねた形の屋根。そしてマンサルドの窓を囲むように黒く露出する梁、柱。丸く突き出たバルコニーに咲くゼラニウムらしい鉢植え。それら一つ一つに人間の息づかい、温もりといったものが感じ取れる。たとえば言えば故宮あるいは胡同の窓にイメージする人間の顔は、天子たる故、民衆たる故に没個性的なものでしかないが、青島の洋館の窓から覗く顔には明らかに人間の表情がある、といったところだろうか。

そしてもう一つ、坂。北京の威圧的な壮大さが、大平原の真ん中に計画された帝王の都城のものなら、青島は元来海辺に住む人々が（あるいは、これも小池説によるなら、中国人になかった「海辺に住む」という発想をした欧州人が）自然発生的に傾斜地に立てた家々の集積であろう。坂には、息づく生身の人間の哀愍が漂っている。そして、短いスロープのくりかえしには、北京に聳立する白楊のような巨樹は適さず、やや小ぶりの、控えめながら個性に富み、道行く人々に對等に語りかけてくるスズカケヤカエデなどこそがふさわしい。

青島のあの「大きさ」は、伴ったトラブルのすべてを越えて私たちを圧倒した。小青島での磯遊びの楽しさも忘れがたい。工場で飲む青島啤酒の味もさすがであった。しかし、それらが消えた後もなお私の心に残るであろう青島の印象は、あの街並みに接しての「生き返る!」感覚である。